淡路島の化石 新種の恐竜だった

「ヤマトサウルス・イザナギイ」と命名！

復元画　©服部雅人

兵庫県の淡路島で、白亜紀後期の約7200万年前の地層から見つかった化石が、新種の恐竜だとわかりました。化石を調べた北海道大学教授の小林快次さんたちが「ヤマトサウルス・イザナギイ」と名づけ、科学誌に発表しました。（浴野朝香）

草食恐竜・ハドロサウルス科の仲間

新種の恐竜は、白亜紀後期に大繁栄した草食恐竜・ハドロサウルス科の仲間です。この仲間はオーストラリアとインド以外の大陸に広く分布していました。カモのように長くて平べったいくちばしが特徴。今回の新種は成長したものだと、体長7～8メートル、体重4～5トンぐらいになるそうです。

最初に化石が見つかったのは2004年です。兵庫県姫路市のアマチュア化石研究家の岸本眞五さんが淡路島で、恐竜の下あごの一部と見られる骨などを発掘しました。当時はハドロサウルス科であることしかわかっていませんでした。その後、専門の調査チームも加わり、歯や肩の骨などこれまでに計23点が見つかっています。

化石を見て「めずらしい」と感じた小林さんたちは、本格的な研究を開始。歯や骨などの特徴をデータ化して、ほかのハドロサウルス科の70種と比べました。その結果、食べ物をかみくだくために使われる歯などに、ほかのハドロサウルス科の恐竜には見られない独特の特徴がいくつかあり、新種とわかりました。

ヤマトサウルスのシルエット。白いところが見つかった部分　©増川宏俊

ヤマトサウルスの化石を前に発表する小林快次教授（左）と化石を見つけた岸本眞五さん　©朝日新聞社

2000万年も同じ姿で生き続けた

ヤマトサウルスの歯骨（下あごの骨の一部）。長さは53センチほど　兵庫県立人と自然の博物館提供

さらに、ヤマトサウルスは原始的な種であることも明らかになりました。ハドロサウルス科の恐竜は、恐竜が最も進化をとげた白亜紀後期の恐竜です。しかしこの調査で、ヤマトサウルスは肩の骨の一部が発達していないことがわかりました。ヤマトサウルスは絶滅するまでの2000万年の間、同じ姿のまま生き続けていたとみられます。

「人間で考えると、人間の祖先となる生き物が、令和の今も変わらず生きていたというのと同じことなので、とてもすごいことです」と小林さん。ヤマトサウルスが原始的な種だとわかったことで、ハドロサウルス科の恐竜がどうやって生まれたかという起源や進化の方法がわかるようになるといいます。

原始的な仲間は中国やモンゴルでも見つかっているため、小林さんたちはハドロサウルス科の繁栄の起源は東アジアにあり、その後、生息域を広げていったのではと考えています。

ヤマトサウルス・イザナギイの名前は、日本の古代を意味する「やまと」と、神話に登場する神「いざなぎ」から付けました。淡路島が神話の中で日本の起源とされる場所であることと、ヤマトサウルスがハドロサウルスの起源であることにちなんだものです。

動く恐竜見てみよう！

https://www.asahi.com/asahinews/